

国語基礎 問題② / 3	キャリア教養学科 食物栄養専攻 福祉こども専攻	受付番号	番 氏名
-----------------	-------------------------------	------	------

五 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

あるとき、「藤井二冠を殺害予告疑いで追送検」という見出しが各種ニュースサイトに躍ったことがある。思わずぎよつとしたが、実際の記事の内容は、将棋の藤井聡太二冠（当時）が、誰かの殺害予告を行ったのではなく、藤井二冠に殺害予告を行った者が追送検された、という内容だった。

そのおよそ十日後には、「列車が人と接触して死亡」という見出しがテレビニュースで流れた。列車が「死亡」するわけがないから、この見出しが言わんとすることは分かる。ただ、うまく頭に入ってこない奇妙な文章であることは確かだ。

さらに、その三日後には、「14人感染、さいたまの中学生など 1人死亡」という見出しをある新聞が掲げていた。ついに十代の若者からも新型コロナウイルス感染症による死亡者が出ってしまったのかと驚き、実際に記事を読みると、死亡したのは中学生ではなく、六〇代の男性だった。

ほかにも数え上げればきりががないが、これらの見出しに共通の問題点は、言葉遣いが拙いがゆえに誤解や混乱を招いているということだ。たとえば、冒頭の「藤井二冠を殺害予告疑いで追送検」という見出しは、「を」を「の」に置き換えるだけで、**A**、「藤井二冠の殺害予告疑いで追送検」とするだけで、誤解を避けることができる。

B、「列車が人と接触して死亡」という見出しも、「列車」と「人」を入れ替え、「人が列車と接触して死亡」とすれば、文章のおかしさは改善される。ただ、**ⓧ**なぜなら、列車と接触することによる死亡がニュースとなるのは通常は人のみだからだ。つまり、死亡したのは人であれば、わざわざ「人が」と書く必要はない。それゆえ、見出しのごく限られた文字数を埋めるべきはこの二文字ではなく、別の情報をもたらす言葉だろう。

「14人感染、さいたまの中学生など 1人死亡」という見出しについてはどうだろうか。この見出しの最大の問題は、「さいたまの中学生」と「1人死亡」という語句が隣接していることだ。人には、最も近い距離にある言葉同士を意味的に連関させようとする自然な傾向がある。そのため、私たちはこの見出しを読むと、さいたまの中学生が死亡したとまず理解するのである。**C**、この二つの語句の距離を遠ざけて「さいたまの中学生など14人感染 1人死亡」などとすれば、誤解の余地は少なくなるだろう。

Ⓨ中学生の感染に注目しているのか、それとも感染者数なのか、あるいは死亡者の存在なのか、焦点が明確でないからだ。私が危惧の念を覚えるのは、いわゆる「てにをは」がなっていない見出しが、報道の場でこれほどの頻度で出現しているということだ。マ

スメディアは言葉を武器に公権力とも対峙すべき機関だが、誤解や混乱を招く表現を多用してしまつては、自らの言葉への信頼を失うことにもなりかねない。とはいえ、こうした言葉の型崩れはマスメディアに限った話ではない。同様の拙い表現は、学生が書くレポートであれ、無数に行き交うメールであれ、絶え間ないSNSへの投稿であれ、私たちが普段触れる文章のなかに溢れている。

もちろん、過去の人々は皆「てにをは」が整った文章を書いていた、と言うつもりはない。これまでも拙い表現は無数に流通していたはずだ。しかし、いまの時代、言葉の型崩れの弊害が以前より大きくなっているのも確かだろう。なぜなら、情報収集が主にインターネットを用いたものとなり、普段の生活のなかにSNSや電子メール上のコミュニケーションが浸透している現在、私たちは日々、十分なコンテクストなしに短い文章を書いたり解釈したりすることを強いられているからである。

国語基礎 問題③ / 3	キャリア教養学科 食物栄養専攻 福祉こども専攻	受付番号	番 氏名
-----------------	-------------------------------	------	---------

たとえば、いま私たちの多くはニュースをインターネット上でチェックしているが、まず目に飛び込んでくる文字は見出しのみであり、それをクリックする手間をさらになけなければ、具体的な内容を——つまり、見出しの言葉の背景となる⑦を——知ることができない。だからこそ、見出しによるミスリードという事態も頻発してしまう。(特にネットニュースには、意図的に誤解を誘ってクリックさせようとしている悪質なものも多い。)

また、SNSの空間においても、投稿した文章が前後の文脈から切り離されて拡散され、誤解を呼び、いわゆる「炎上」を引き起こすことは日常⑧だし、簡潔な伝達を旨とする電子メールのやりとりのなかで、言葉の意味の取り違えからトラブルが生じることも珍しい話ではない。

以上のことから言えるのは、短くとも誤解や混乱を招きにくい文章を書く技術が、いま私たちにとってかなり重要性を増しているということだ。この技術は、自分の意図を正確かつ効果的に他者に伝えることに資するだけではなく、誤解や混乱を招きやすい文章に対して敏感になり、それを注意深く読むことにも直結するだろう。(古田徹也 著 『いつもの言葉を哲学する』朝日新書 2021年所収)

問一 傍線部ア「拙」イ「対峙」ウ「頻発」の漢字の読みを答えなさい。

問二 空欄A～Dに入る適切な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア それゆえ イ しかし ウ つまり エ また

問三 空欄⑧・⑨に入る文としてふさわしいものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア この見出しは自然だがありふれた表現だ。

イ この見出しは散漫な印象を与える。

ウ わかりやすい見出しとなり誤解を与えない。

エ 見出しとしてはまだ十分とは言えない。

問四 傍線部①「いまの時代、言葉の型崩れの弊害が以前より大きくなっている」のはなぜか、具体的に説明している内容を、百字程度までめて答えなさい。

問五 空欄②に入る言葉を本文中から抜き出し、六字で答えなさい。

問六 傍線部②「意図的に誤解を誘って」とあるが、どのような目的によるものと考えられるか、簡潔に答えなさい。

問七 傍線部③は、「ごく平凡なありふれた事柄。」という意味の言葉です。空欄に漢字三字を補い、この言葉を完成させなさい。

問八 筆者は、今の私たちにとって文章を書くうえで必要とされるのはどのようなことだと述べているか、二十五字以内で答えなさい。